

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏名	藤 居 亜矢子
学位の種類	博士（比較文化学）
学位記番号	文博甲第7号
学位授与の日付	2010年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	トロロープとアイルランド
論文審査委員	主査 日下 隆平 教授 副査 藤森かよ子 教授 副査 小野 良子 教授

<博士論文の要旨>

トロロープとアイルランド

藤 居 亜矢子

この論文では、19世紀イギリスの小説家、アンソニー・トロロープ (Anthony Trollope 1815-82) によるアイルランドテーマの小説、つまり、アイルランドを舞台にした小説5作とアイルランド出身の青年 Phineas Finn を主人公とした小説2作を中心に扱った。

トロロープは、19世紀ヴィクトリア朝の小説家であるが、多作家で知られている。長編小説48編（自伝・死後出版も含む）、短編43編、旅行記5編、伝記3編、劇2作を執筆している。彼は、小説家であると同時に郵便職員でもあった。それだけでなく、雑誌の編集者をしていたこともある。また、多くの新聞・雑誌に、教育・文化・政治・宗教など様々な分野に関する文章を寄稿しているように、ジャーナリスト的側面も持っていた。彼は、郵便職員としてだけでなく、個人的にも様々な地域を旅行しており、ヨーロッパやアメリカはもちろん、アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、西インド諸島などを訪れている。このように、トロロープの活動範囲は多岐にわたっていた。そのため、彼の小説も幅広い範囲を扱っている。トロロープは、イングランドの架空の都市 Barset を舞台にした小説やロンドンを中心とした政治小説でよく知られているが、アイルランドや海外を舞台にした作品も執筆している。

この論文では、トロロープの多くの作品の内、アイルランドを舞台にした作品とアイルランド出身の青年 Phineas がロンドンで国会議員として活動する小説を扱った。「境界人 (marginal men)」としてのトロロープに注目し、彼が作品において、アイルランド固有の問題やイングランドとアイルランドの関係をどのような立場から描写しているのか、その際、アイルランドに共感するイングランド人としての立場が作品にどのような影響を与えているのか、イングランド人であるトロロープが、どのようなアイルランド像を理想と考え、どのような役割をアイルランドに求めたのかについて、彼の作品と書簡、エッセイなどを通じて分析した。また、トロロープがアイルランドを訪れた1841年と、彼の亡くなる1882年とでは、アイルランドを取り巻く状況だけでなく、彼の立場や内面も変化したが、この変化が作品に与えた影響も考察した。

第1章では、*The Macdermots of Ballycloran*（以下 *The Macdermots*, 1847）

において、アイルランドへの共感とイングランド人的視点、というふたつの立場がどのように作品に反映され、影響を与えているのか、そしてトロロープの内面がどのように主人公 Thady に反映されているのか、について分析した。第2章では、*The Kellys and the O'Kellys; or, Landlords and Tenants* (以下 *The Kellys*, 1848) において、ふたつの立場が作品にどのような影響を与えているのか、イングランド出身のトロロープが、どのようなアイルランド像を示しているのか、について分析した。第3章では、*Castle Richmond* (1860) において、トロロープのイングランド公務員としての立場、アイルランドへの共感、実際に飢饉時のアイルランドを見た経験が、作品にどのような影響をもたらしているのか、また、トロロープの併合を支持する立場が、作品においてどのように示されているのか、について分析した。第4章では、*The Landleaguers* (1883) において、トロロープがどのようなアイルランド像を描いているのか、について、これまでのアイルランドを舞台にした作品と比較しつつ、分析した。第5章では、アイルランドとイングランドがどのような関係にあることをトロロープは望んでいるのか、について *Phineas Finn* (1869) を中心に分析した。

19世紀アイルランドに関わったイギリスの思想家の中には、アイルランドに対して共通した態度が見られた。彼らには、最初のうちアイルランドに理解と同情を示すものの、自治の機運が高まると一転してその機運を制止しようとする、言わば、アイルランドへの相反する感情がみられた。歴史家 R.F. Foster は、*Paddy & Mr. Punch* において、彼らのことを「境界人」と呼んでいる。「境界人」は、文化の境界に身を置く人間、つまり、この場合、アイルランドとイングランドという二つの文化に接する人間であった。トロロープはこの典型例といえる。

トロロープの場合、イングランド社会にうまく適合できずアイルランドを訪れるが、アイルランドで多くのものを得ることになる。仕事でアイル

ランドを訪れてから、これまで順調とは程遠かった彼の人生は良い方向へと変化する。彼の狩りへの愛好は生涯続くことになるが、初めて狩りを体験したのはアイルランドにおいてであった。妻と出会い結婚したのも、子供が生まれたのも、小説を書き始めたのもアイルランドにいる時である。地主の屋敷においても、紳士として対応され、歓迎された。アイルランドにおいて彼は望んでいた自分の姿を手に入れることができた。そのため、アイルランドはトロロープが生まれ変わった場所として、生涯特別な土地であり続けた。

アイルランドにおいて、トロロープは様々な階級の人間と交流することになる。プロテスタント系イングランド人であるトロロープは、イングランドでいくら失敗していても、アイルランドでは自動的に支配者階級に属することになる。その結果、イングランドでは難しくとも、アイルランドでは、地主階級と何の問題もなく交流できた。また、彼の郵便局員としての仕事は、住人の不満を聞くのが主な仕事であったため、小作人階級の生活も知ることができた。その結果、イングランド出身でありながら、アイルランドをよく知る人間となっていく。

こうして、アイルランドを訪れた結果、イングランド的背景を持つトロロープは、イングランドとアイルランド、というふたつの異なる文化を理解しうる立場を持つことになった。このように、アイルランド体験は、トロロープ個人に大きな影響を与えた。

アイルランド体験は、トロロープ個人だけでなく、小説家としてのトロロープにも大きな影響を与えた。彼による最初の小説、*The Macdermots* はアイルランドで執筆され、アイルランドを舞台にしている。第二作目の小説、*The Kellys* もまたアイルランドを舞台にした小説である。1840年代と50年代の大半をアイルランドで過ごした後、1859年にアイルランドを去ることになるが、その時別れを記念して、*Castle Richmond* を書いた。イ

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

ングランドへと帰還した後も、アイルランドと関わりを持ち続けた。アイルランドを主題にした作品は、イングランドでは人気がない、ということを知りながらも、アイルランド出身の青年、Phineas Finn を主人公とした一連の小説や、アイルランドを舞台とした *An Eye for an Eye* (以下 *An Eye*, 1879) という小説を執筆している。また、雑誌にもアイルランド問題に関係する意見を掲載している。トロローブが執筆途中で死亡したため、未完成に終わることになったが、最後の作品、*The Landleaguers* もアイルランドを舞台にした作品である。このように、彼は死ぬまでアイルランドと関わりを持ち続けた。

また、トロローブは、作品において、アイルランド史における重要な出来事を扱っている。例えば、*The Kellys* では、1844年におけるオコンネル裁判を、*Castle Richmond* では、大飢饉を、*The Landleaguers* では、土地戦争を扱っている。彼が、イングランド人としての視点から、これらの出来事をどのように描いているのかは重要である。

アイルランド体験の影響は、トロローブ個人やアイルランドを舞台にした小説だけでなく、イングランドを舞台にした小説にも及んでいる。彼は *Barset* というイングランドの架空の都市を舞台にした一連の作品で有名であるが、このシリーズに登場する貴族と、アイルランドのアングロ・アイリッシュ系貴族との類似について指摘する批評家もいるように、イギリスを描いていても、アングロ・アイリッシュの姿が反映されていることがわかる。また、トロローブは、現在の制度を支持すると同時に、批判もしているが、イングランド社会をこのように客観的に見ることができるのは、アイルランドという別の文化を経験したことも大きい。このように、アイルランド体験は、トロローブのアイルランド小説だけでなく、イングランド小説にも大きな影響を与えた。

トロローブはアイルランドの文化、現状をよく理解していた。この点に

おいて彼はアイルランド内部の人間である。しかし、イングランド出身である以上、アイルランドにとっては他者である。また、アイルランドを訪れた時点では、イングランド社会に適応できない、周辺に位置する人物であった。そのため、アイルランドを訪れた結果、彼は二重的な立場を持つことになる。

トロロープが持つ二重性は、作品にも反映されている。例えば、最初の *The Macdermots* の場合、二重性は登場人物だけでなく、その構造にも表れている。この作品は、カトリック系アイルランドの語りをイングランド人の執筆者で囲むという、いわば「入れ子構造」になっている。現地人だけではアイルランドの視点に偏りがちになってしまうところを、執筆者というイングランドの視点を加えることで、バランスを取ろうとしている。この点においてもアイルランドへの共感とイングランド人読者への配慮というふたつの立場をみることができる。ふたつの立場は、例えば、Macdermot 家に対する態度に表れている。トロロープは、一家の苦境に同情しているが、その一方で、一家にも苦難の原因があると描いている。一家の問題とアイルランドの問題を重ね、一家にも原因があると描くことで、アイルランド問題におけるイングランドの責任を軽減しようとしている。この共感と批判、という相反する態度は、他の作品においても示されている。

トロロープは、アイルランドに好意を抱いているが、アイルランドに対する否定的なイメージも常に存在していた。アイルランドを舞台にした小説では、小作人の反抗、飢饉、殺人など、非日常的な出来事がよく起こる。例えば、最初の *The Macdermots* と最後の *The Landleaguers* では、殺人が起こる。また、アイルランド出身の Phineas が主人公の小説は、イングランドが舞台であるが、彼が強盗、決闘、殺人など、暴力的な事件に巻き込まれる。これらのことから、アイルランドには、非日常や暴力性がつきまとう、というトロロープの考えは変化していないことがわかる。しかし、

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

否定的なイメージが存在する一方で、肯定的なイメージも常に存在していた。重要なのは、常に両方のイメージが、彼にはつきまとっていた、ということである。

賞賛と批判、という相反する態度はエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser 1552-99) やウィリアム・メイクピース・サッカレー (William Makepeace Thackeray 1811-63) など、アイルランドを訪れたイングランド人も示していた。そうすると、トロロープたちが示す、相反する態度は、「境界人」の特徴のひとつと言える。

トロロープのアイルランドに対する共感には、作品に大きな影響を及ぼすことがある。例えば、*The Macdermots* の主人公 Thady にはトロロープの、特に若い頃のトロロープの境遇や心情が反映されている。そのため、彼は Thady に対し、強い共感を示している。トロロープはアイルランドの語りを、イングランドによる編集で囲むことで、アイルランドに共感しすぎないようにしたが、Thady への強い共感のために、アイルランド側にひどく傾いた結末になってしまう。このように、アイルランドへの共感には、イングランドとアイルランドのバランスを取ろうとするトロロープの目論見を失敗に終わらせることになった。後の *Castle Richmond* においても、アイルランドへの共感が、トロロープの主張を揺るがす結果となっている。このことから、アイルランドへの感情が作品に及ぼす影響の強さを窺うことができる。アイルランドへの感情は、トロロープの晩年、自治への強い反発として表れてくる。

トロロープが、イングランド出身である以上、イングランド人的視点は、当然、作品に含まれることになる。そのため、アイルランド体験の結果、彼のアイルランドに対する態度には、イングランド人としての態度、アイルランドに対する共感的態度、または批判的態度が共存することになった。このことは、トロロープによるアイルランドテーマの作品にも当てはまり、

ひとつの作品に異なる態度が同時に示されることになる。この異なる態度がどのように影響しあい、表現されているのかが、作品を分析する上で重要な点となってくる。

トロロープの作品で描かれるアイルランドは、イングランドのフィルターを通した、現実のアイルランドを変形させたものである。例えば、*The Macdermots* は、アイルランドの住人から聞いた話をイングランドの人間が書き記した、という設定になっている。そのため、作品で示されるアイルランド像は、イングランド人というフィルターを通したものとなっている。他の作品にも、政府や地主階級を弁護するイングランド人としての態度が示されていることから、同様の変形や制御が行われていると考えることができる。このように、作品において示されるアイルランドは、実際のアイルランドに変形や制御を加えたものであり、このことは、作品に共通する特徴である、と考えられる。

Phineas Finn の主人公である Phineas は、アイルランドとイングランドを行き来するが、“[Phineas] felt that he had two identities, — that he was, as it were two separate persons, [. . .].” (1:330) とあるように、彼のアイデンティティはイングランドとアイルランドの間で揺れ動いている。Phineas と同様の揺らぎが、トロロープに起こっても不思議ではない。

イングランドへ帰還後、トロロープの立場は、徐々にイングランド寄りになっていく。それは、例えば、作品における地主像の変化においても見ることができる。トロロープがアイルランド在住時に執筆した、アイルランドを舞台にした作品の主人公は、ゲールとのつながりが深い。*The Macdermots* の主人公、Thady Macdermot は、ゲール貴族の末裔でカトリックであった。*The Kellys* の主人公、Frank はイングランドで教育を受けたプロテスタント系地主である。しかし、血縁的にゲールとのつながりを持ち、ゲールの部族長を連想させるところがある。*Castle Richmond* は、

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

トロローブがアイルランドを去る時に執筆が開始され、イングランドで完成された。そのため、地主像に変化が見られる。主人公は、イングランドで教育を受けたプロテスタント系アングロ・アイリッシュである。Frankのようにゲール系アイルランドに近い地主は、作品の最後に、アイルランドを去っていく。最後の *The Landleaguers* では、イングランド出身のプロテスタント系地主が中心となる。このように、トロローブの地主像は、よりイングランド寄りになっていった。

トロローブの併合を支持する態度は、生涯を通じて変化せず、他のアイルランド作品においても共通して見ることができる。晩年、アイルランド自治運動が活発になると、自治に対し、強い反感を示すことになる。また、晩年には、自治運動だけでなく、土地戦争（1879-）も起こるなど、彼の知るアイルランドは急激に変化しようとしていた。急激な変化に対する反発は、作品における反抗的な小作人の扱い方の変化にも表れている。最初の *The Macdermots* では、反抗的な小作人に完全に共感するわけではないが、権力を行使する人間が腐敗していることによって、反乱分子が生み出される状況が存在する、と理解を示している。その一方で、こうした反乱分子に恐怖を感じるプロテスタント系地主の姿も描かれる。サッカレーは、*The Irish Sketch Book*（1842）において、アイルランドには、カトリックとプロテスタント、ふたつの真実が存在すると述べている。*The Macdermots* は、サッカレーの述べるふたつの真実が描かれている、と言える。一方、最後の *The Landleaguers* は、脅威を受けるプロテスタント系地主の立場から描かれ、小作人が反抗する理由については特に描かれていない。この態度が、自分にとって大切なアイルランドを奪うものに対する強い反発を示しているのであれば、作品で示される過剰なまでの反発は、アイルランドに対するトロローブの強い感情を反映していることになる。また、自治への反発は、アイルランドは自分たちイングランドのものである、と考え

るイングランド人的態度の表れと言える。いずれにせよ、アイルランドは、作家としてのトロロープだけでなく、個人としてのトロロープにとっても、重要な構成要素であることがわかる。

自治への強い反発は、歴史家のジェームズ・フルード（James Anthony Froude 1818-94）や政治家のランドルフ・チャーチル卿（Lord Randolph Churchill 1849-95）など、アイルランドに深く関わった人物にも見られる、と Foster は述べている。このことから、自治に対する過剰な反発も「境界人」の特徴のひとつと言える。

トロロープ自身は、併合を支持しているが、登場人物たちは反対の結果を示すことがある。彼は、アイルランド出身の青年である Phineas Finn を生み出した。Phineas もまた、アイルランドとイングランド、というふたつの文化への帰属意識を感じている。結局、Phineas がふたつの立場を両立することができなかつたように、ふたつのアイデンティティは両立できないものとして描かれる。この結果は、トロロープの内面において、二国の共存は不可能であることを暗示している。*The Macdermots* においても、プロテスタント系アングロ・アイリッシュとカトリック系ゲールの対立が描かれていることを考えると、ふたつの世界は相容れないものであるという考えは、常に存在していたことがわかる。このように、登場人物は、トロロープの併合支持、という主張とは、反対し、矛盾する結果を示している。このように、彼のアイルランドテーマの作品には、一人の、アイルランドを体験した作家の、アンビバレントな感情が表れている。

トロロープは、アイルランドとイングランドの間で揺れ動いた。Phineas が双方の間で苦悩する姿は、トロロープの感情を反映していると考えられる。トロロープは、アイルランドとイングランド、どちらか片方だけを支持することができず、双方に対し忠実であらうとする。例えば、*The Landleaguers* は、最も地主側で、一方的な作品であると言われているが、

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

この作品においてさえ、地主階級に対する疑問が明確にはないが、示されている。このことから、トロロープ自身は完全にはイングランド、または地主側の人間ではないことがわかる。その一方で、作品には、地主に反抗するアイルランドの小作人たちに対する反感も示されている。そのため、完全にはアイルランド側の人間でないこともわかる。その結果、作品はあいまいな立場を示すことになる。このような、どちらにも完全には属さないトロロープのあいまいな立場は、アイルランド体験がもたらした副産物のひとつである、と言える。同様の態度が *Castle Richmond* においても見られた。このあいまいな立場は、トロロープの二重的な立場から生まれたものである。このことから、彼が持つ二重性やそこから生まれるあいまいな立場は、アイルランド体験がもたらした副産物であり、彼によるアイルランドテーマの作品における特徴のひとつである、と言える。この揺らぎこそ、トロロープによるアイルランドテーマの作品の特色であるだけでなく、彼の生き方そのものなのである。

このように、個人としても、作家としても、アイルランドがトロロープに与えた影響は計り知れなく、彼の基盤となっている。トロロープが持つ二重性やアイルランドに対する相反する態度、そして自治に対する強い反発は、典型的な「境界人」の特徴であった。この特徴を持つゆえに、彼の作品は、多様性があり、様々な解釈を許す。

<博士論文審査結果の要旨>

トロロープとアイルランド

審査委員 主査 日下 隆平

審査委員 副査 藤森かよ子

審査委員 副査 小野 良子

論文内容

19世紀イギリスの小説家、Anthony Trollope は、自伝を含めると、長編小説48冊を執筆している。アイルランドと Trollope の関係は、1841年に、アイルランドに郵政監察官補佐 (surveyor's clerk) として赴任したことに始まる。以後、18年間滞在し、植民地アイルランドは自己再生の場となり、彼は任地に特別な感情を抱いた。Trollope は、作家として、アイルランドで誕生し、当地でその生を終えた、といえる。任地アイルランドは土地回復運動から自治運動が進行し始める時代であった。その体験は、イングランドを舞台とする小説にも影響が及んでいる。藤居論文が研究対象とするのは、アイルランドを舞台にする作品4編 (第1部) とイングランドを舞台にするアイルランド青年に関する作品1編 (第2部)、計5編である。以下、その内容を簡単に報告する。第1章では、*The Macdermots of Ballycloran* (1847) という最初の小説を扱っている。任地に赴任して間がなかったが、1830年頃の状況をよく把握している。小作人・地主の生活や風習を背景に、この作品は、ゲール系地主マクダーモット家の没落を描いた物語である。特徴として、Edgeworth の『ラックレント城』(*Castle*

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

Rackrent, 1800) を想起させる形式を持ち、ゲール系アイルランド人の語りをイングランド人の執筆者で囲むという、謂わば「入れ子構造」になっている。藤居論文は出版当時の新聞・雑誌批評などを綿密に調べている。その中で Sir William Gregory などのアイルランド支配階級に作品が好意的に迎えられたことを取り上げて、アセンダンシーの望むアイルランド像を描いた点に注目する。第2章では、*The Kellys and the O'Kellys; or, Landlords and Tenants* を扱う。カトリック教徒解放者、Daniel O'Connell 裁判が行われた1844年頃の社会が作品背景となる。同裁判を意識しながら、作品が O'Connell に触れるのを最小限にとどめている点に藤居論文は注目し、ここに、実際にはアイルランド併合の解消に消極的な Trollope の態度が見てとれる、と指摘している。つまり、宗主国イングランド住民の願望が強く反映されたものであるとし、そのアイルランド像は、Trollope によって制御・編集されたものである、と主張する。*Castle Richmond* (1860) を論じた第3章では、宗主国の郵政監察官としての立場と任地への共感との間で揺れる Trollope の感情を、実際に大飢饉に直面した経験を通じて、藤居はテキストから跡づけている。ゲール系地主 Owen とアングロ・アイリッシュの地主 Herbert との対照によって、Trollope が比喩的に、併合支持の態度を述べていると、藤居は指摘している。この作品には、永久に追放されることになった Owen への深い愛情が感じられ、Trollope のアイルランドへの二律背反的感情がもっとも端的に表現された作品である、と述べる。第4章では、未完の遺作『土地同盟の人々』(*The Landleaguers*, 1883) を論じる。この小説の背景は土地戦争(1879~1881)であり、アングロ・アイリッシュの地主 Jones 家の立場から、当時のアイルランドの状況が描かれる。藤居論文は、小作人による「土地同盟」参加の正当性がこの作品の中で明示されていないことから判断し、支配者側に共感する Trollope を指摘し、この点に晩年の Trollope の政治的立場を読み取って

る。第5章では、イングランドにとってのアイルランドの役割を Trollope から論じている。1866～67年における選挙法改正時のイングランドを舞台に *Phineas Finn* を中心に分析したものである。作品では、アイルランドとイングランドの間で揺れる Phineas の帰属意識を論じ、Matthew Arnold がケルト民族にみた、サクソン族の補完的要素を Trollope は Phineas に見出している、と述べる。藤居論文の中で一貫した論点は、アイルランドに関わったイングランド住民、或いは、アングロ・アイリッシュに共通する態度に共通する感情と典型的な行動様式であった。それは、赴任した当初は、任地にイングランドの補完的要素を見出し、強い共感と愛着を覚える。しかし、アイルランド自治問題が浮上すると、その芽を何とかして摘もうとする感情である。

研究方法

1830年～1870年頃までの自治運動が高まるアイルランドの社会事情を正確に把握した上で、先行研究の、Dougherty, Lonergan, Roy Foster など数多くの論文を引用しつつ進める、Trollope のアイルランド像についての論考には説得力がある。なかでも、Foster は、イングランド社会に適応できず、アイルランドに新天地を求めたイングランド人のことを「境界人」(marginal men)と呼んでいる。「境界人」とは、文化の周縁に身を置く人間、つまり、この場合、アイルランドとイングランドという二つの文化に接する人間であった。Trollope はこの典型例といえる。しかし、ふたつの円が一部重なる部分のように、双方の文化が重なる部分は、同時にふたつの中心からもっとも隔たった周縁的存在でもある。Trollope の二重性は、まさにこの重なる部分であり、作品の登場人物においても反映されることになる。この論文中の人物像は、Trollope と同様、双方の文化に身を置く故に、ふたつの帰属意識に揺れる人物として設定されている。Trollope は

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

アイルランドへの共感だけではなく、批判も示している。共感と批判、愛着と嫌悪というアンビバレンツな感情は、彼の偉大な先人である、Edmund Spenser や W.M. Thackeray, 歴史学者 J.A. Froude など、アイルランドと関わったイングランドの人間に共通するものであった。藤居論文はテキストを綿密に検討することで、「境界人」のもつ性質を Trollope に跡づけている。

論文の講評

翻訳書も殆どなく、邦文による先行研究が限られた中で、Trollope に果敢に挑もうとした態度は、何よりも評価されてしかるべきである。また本論は、アイルランド問題から論じた、最初の詳細な Trollope 研究といえる。作家としての伝記的事実と、作品に描かれたアイルランド問題の関連を明確に論述している。つまり、Trollope がアイルランドを愛しつつ、支配者としてのイングランドの立場を超えることが出来ない作家のありよう、もしくは、限界を、主要作品の丹念な分析をとおして指摘している。その指摘には説得力がある。文章が簡潔で、記述に曖昧模糊とした表現がない。論旨明快である。イングランドとアイルランドの関係が、作品内で、どう直喩されているか、暗喩されているか、的確に指摘している。アイルランドやその人々をイングランドやその人々の補完として見る、一種のオリエンタリズムは宗主国と植民地の関係にありがちなことでもある。宗主国の人間が植民地の人間にいたく類いの「分離や独立は絶対に認める気はない。あくまでも自分たちの喪失したものを補完する存在として魅力的であって欲しい」という欲望は稀有なことではない。とはいえ、この欲望が共通する宗主国の住人の行動パターンであっても、そこに至るまでの感情のプロセスは様々と言える。本論は、そのプロセスを、テキストから、再確認している。広範な海外文献を読み、Trollope 研究の流れと、当時のアイルラ

ンド社会の背景を把握しており、研究者としての基本的資質に恵まれていることがわかる。今後の発展が期待できる。また、今後の課題として、作品論の論点が全て、海外論文・研究書に依拠しており、藤居論文分析が海外文献の紹介になっていて、海外論文の論点の批判がない。また、形式面から表記の統一性に欠ける箇所が散見された。このような点の指摘もあったが、これらは今後の研究上の基盤を確立するための助言であり、論文評価を決して貶めるものではなかった。

審査結果

以上の審査内容に基づき、審査委員は主査、副査とも全員一致で、学位申請者・藤居亜矢子への博士学位授与を文学研究科委員会に提案するものである。